




ヌナリヒョン・パパに まかせなさい!



ドロロン村のなかまたち

富安陽子・作
山村浩二・絵



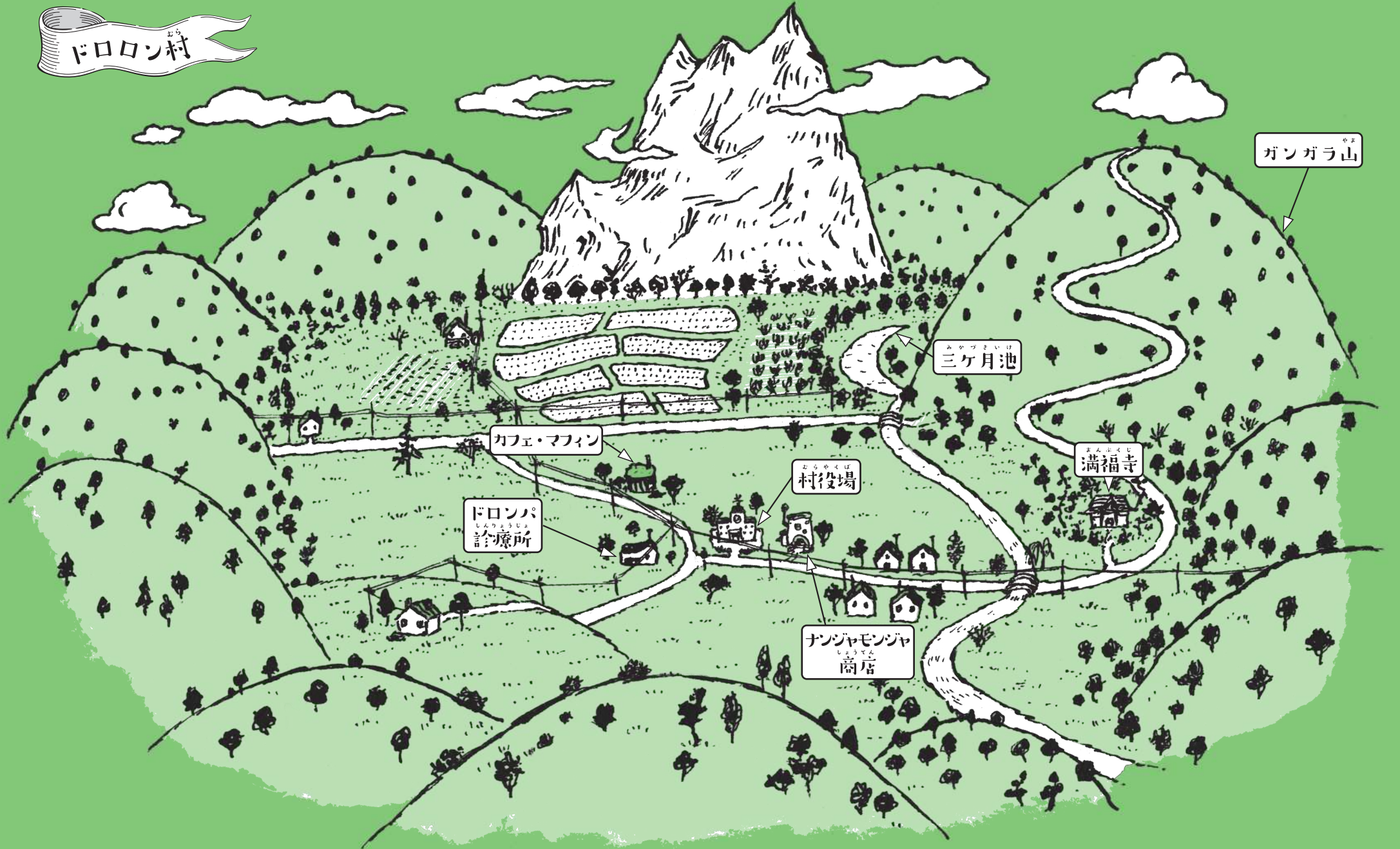


ヌラリヒョン・パパに まかせなさい!

ドロロン村^{むら}のなかまたち

富安陽子・作
山村浩二・絵

ドロロン村



ガンガラ山

三ヶ月池

カフェ・マフィン

ドロンパ
診療所

村役場

満福寺

ナンジャモンジャ
商店

ドロロン村をしつてるかい？

この村は、とてもめずらしい、世界でたったひとつの村なんだ。なにがめずらしいかっていうとね。それは、人間と「ようかい」がいつしよにくらしているっていうこと。

ただくらしているだけじゃないよ。人間もようかいも、ちゃんあんと、この村の住民として、ご近所づきあいをしながらなかくよく生活しているんだよ。

なんで、ひとつの村の中で、人間とようかいがいつしよにくらすことになったんだろう？って、ふしぎに思う人もいるかもしれないね。

じつは、それには、ちよつとした理由があるんだ。





三人のおばあさん、作戦をねる

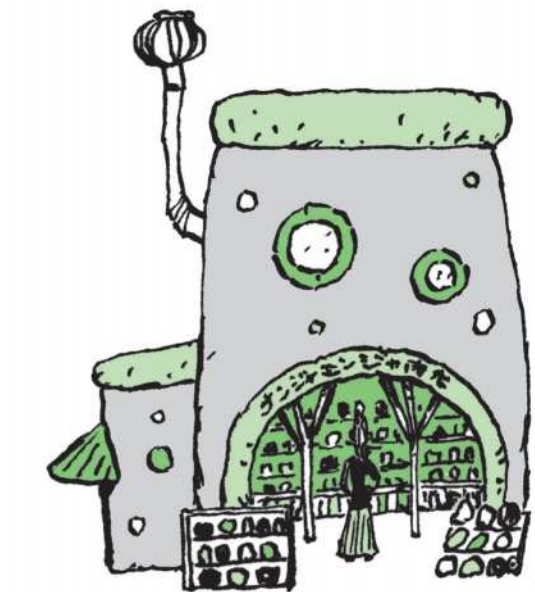
むかしは、ドロロン村にも、たくさんの人たちが住んでいた。四方を山にかこまれた、へんぴな村だったけど、村の人は、田んぼや畑をたがやして、おいしいお米ややさいやくだものを育て、村の東を流れるコソコソ川で魚をとってなかよく楽しく、のんびりとくらしていたんだ。ところが、いつのころからか、わかい人たちがみいんな村をはなれて、町へ出て行くようになったちやっつてね。家ですて、田畑をすてて、町へ行つたつきり、

村に帰つてこなくなつちやつたんだよ。おかげで村の人口は、どんどんへつて、気がつくつと、ドロロン村の住民は、三人のおばあさんだけになっていた。



ナンジャさんというおばあさんと、マフィンさんというおばあさんと、ドロンパ先生というおばあさんだ。

へんてこな名前だつて？ もちろん本名じゃないよ。



村に一けんだけの
「ナンジャモンジャ
商店」という雑貨
屋をひらいているのが、
ナンジャさん。村で
たった一けんの「カ
フェ・マフィン」と
いう店をひらいてい

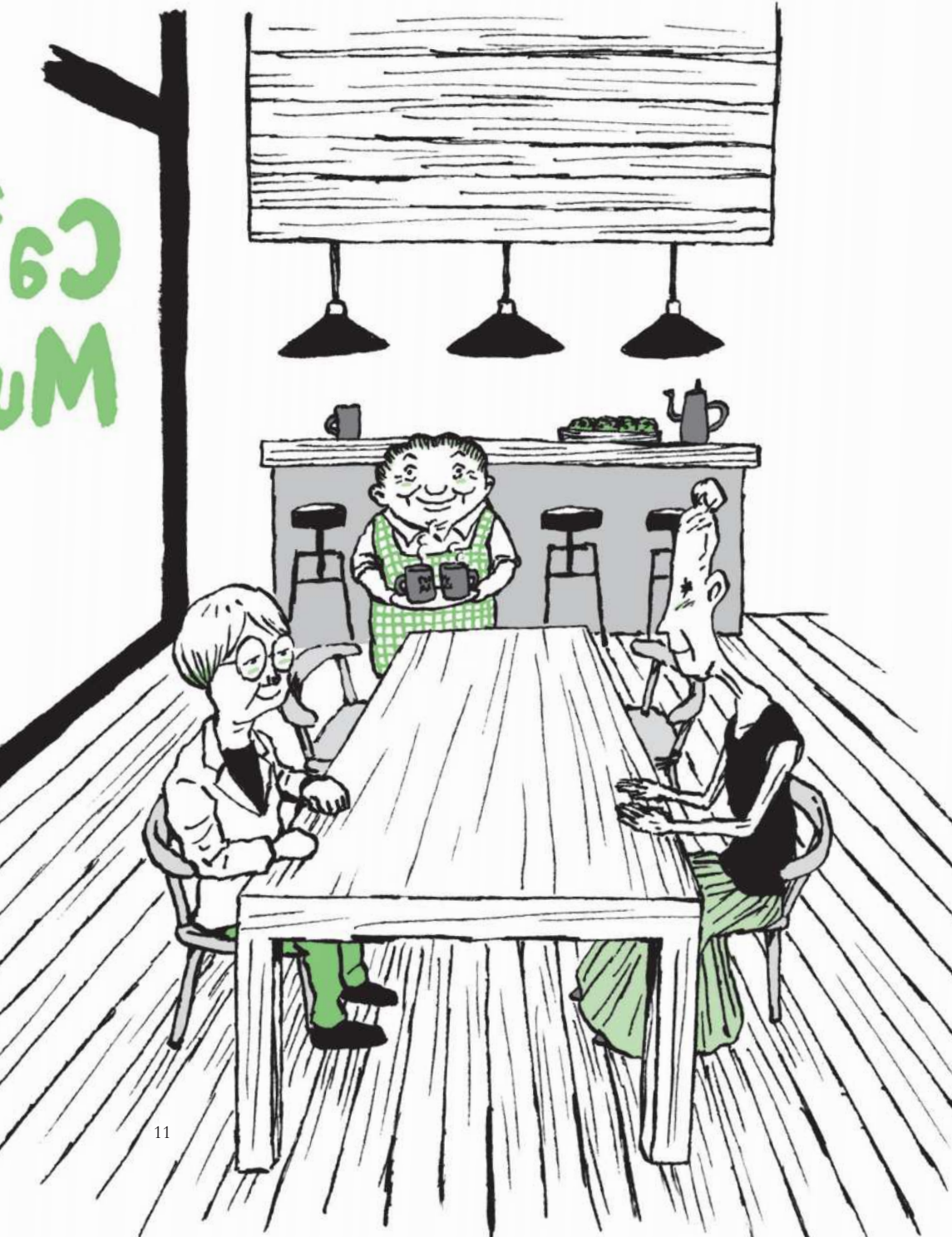


るのがマフィンさん。
それから、また、村
にひとつしかない
「ドロンパ診療所」
つていう病院の先生
がドロンパ先生とい
うわけだ。

三人はもうずっと

前から、そんなふうによばれていたから、もう今ではおばあさんたち自身も、おたがいの本名を思いだせないほどだった。

さて、ある日のこと、いつものようにカフェ・マフィンにあ



つまつて、ぺちやくちやと三人^{さんにん}でおしゃべりをしているうちに、ナンジャさんがこんなことをいいだした。

「ああ、雑貨屋^{ざっかや}なんてやったつて、しかたないよね。お客^{きやく}さんなんて、だあれも来^きやしない。たまあに来^くるお客^{きやく}つていつたら、あんたたちだけなんだもん」

ほそい体^{からだ}に、その広^{ひろ}がったスカートをはいたのつぽのナンジャさんは、雑貨店^{ざっかてん}においてある竹ボウキにそっくりだった。

「きつさ店^{てん}だつて、おんなじよ」と、マフィンさんもいいます。

「どれだけ、おいしいコーヒーをいれたつて、ふかふかのマフィン^やを焼^やいたつて、お客^{きやく}は、あなたたちだけ。これじゃあ、つまらないわ」